

86 誌上発表

『老師雑話記』の脈法

中川 俊之

日本鍼灸研究会

国会図書館所蔵の曲直瀬道三著『老師雑話記』(110-51)は、不分巻、漢文体の医書である。天正5年(1577)、『捷徑弁知集』校訂直後、先師の言葉をもとに記述された。巻末の奥書に「右一百三十六ヶ条。承師語而記之。或随師訓而抄写焉」とあるが、実際には134条で構成され、各条は条番号と題名、次いで本文が記述される。内容は基礎理論、診察、治療など多岐にわたるが、脈診に関する記載も散見する。本発表では、曲直瀬道三の脈診を窺う一端として、『老師雑話記』における脈診記載の検討を行った。

1 『老師雑話記』の脈法

20条に脈に関する記述がある。第2条「四知捷徑」は〈四知〉すなわち望聞問切の四診を記述するが、脈法として「浮沈遲数は病の端」「人迎氣口は内外の準」「左右虚実は血氣の弁」「七表八裏並に九道」を挙げる。

- (1) 診脈部位(左右寸関尺、人迎氣口、菽法)…左右寸関尺は、第36条「左脈皆攻右」、第29条「三陽脈弁」、第37条「氣血虚證弁例」に記述がある。第39条「診脈五重」には『難經』五難由来の菽法が見られる。人迎氣口診は上記記述以外に具体的はない。
- (2) 浮沈遲数…〈浮沈〉や〈遲数〉は、第17条「浮沈静躁」、第27条「遲数偏主」、第54条「診脈略例」、第58条「調氣別劑」、第86条「表裏緩急」、第109条「治痢口伝」などで述べられる。浮脈は〈諸陽表〉沈脈は〈裏〉とする。数脈は〈実強〉、遲脈は〈沈弱(虚弱の誤りか)〉とする。
- (3) 滑濇…第95条「滑濇左右察例」、第97条「痰脈滑濇燥潤」に見られ、滑脈は〈多血少氣、胸上痰多〉、濇脈は〈多氣少血、血虚、喉中痰粘〉とする。
- (4) 脈状分類(七表八裏九道の脈状、相對の脈状)…七表八裏九道は「四知捷徑」の他、第95条「滑濇左右察例」に「七表」、「八裏」の名称のみ見える。第54条「診脈略例」では、〈緊弦・浮沈・革弦・洪細・革実芤・沈伏・微弱・促結・微濡弱・虚結細・長短・長短〉といった相對あるいは相類の脈状の弁別を述べる。第22条「五虚五実」では〈細盛〉の對脈状、第92条「以藥調脈」では〈速緩・太細・沈浮・軟牽、潤燥〉といった5對の脈状を載せる。
- (5) 氣血…氣血は第37条「氣血虚證弁例」、第109条「治痢口伝」、第112条「噎膈因治」に見られ、氣〈氣虚=右脈虚小、緩而無力、氣熱=浮数〉、血(血虚=左脈虚小、数而無力、血熱=遲数)に弁別される。
- (6) 脈診と症状…第28条「立方脈脈證」に〈多是脈に従い、少は證に従う〉とあるのは、脈證と症状が相反した際の方針と考えられる。

2 他の道三医書との関係

9条に他の道三医書との関連が認められる。内訳は『切紙』5条、『診切枢要』1条、『医学指南篇』1条、『医家要語集』1条、『脈約簡略』2条、『診脈口伝集』1条である。

3 考察

道三の脈法は、本書以外に、『類證弁異全九集』(1544)卷之一、『診切枢要』(1566)、『医学指南篇』(1571)、『脈論』(1571?)、『医家要語集』(1572)察脈要語、『和脩脈書』(1574)、『診脈口伝集』(1577)、『脈訳簡略』(1581?)、『切紙』(1581)等から窺うことができる。

道三の脈法は『診切枢要』で確立され、前期(『類證弁異全九集』卷之一)と、後期(『診切枢要』以降)で相違する。『診切枢要』以降では、『丹溪脈訣』を主な引用書とし、浮沈遲数(有力・無力と併せて風湿寒熱(外邪)、虚実冷燥(内邪)の脈證を決定。祖の脈として最重視)、人迎氣口診(内外傷の弁別)などを診察の基軸とする姿勢が認められる。

『老師雑話記』においても、浮沈遲数を「病の端」として重視する記述があるが、これら脈状から脈證を決定する姿勢は認められず、この点で他書の脈法と相違する。また、人迎氣口診は「内外の準」とするも具体的な解説はない。